

# 余暇のひととき

文化協会より

## 川柳

△川柳鹿の子吟社▽

鐘三つ人生一度鳴らしたい  
やっぱりと言われたくない脱皮する  
夫婦みち相身互いの七曲り  
三猿で無事スマートに世を渡る  
今でしよう何処かの国が高笑い  
卒業をしてから学ぶ二にんが五  
倍にして恩を返せる今日の幸  
夕焼けが綺麗夕日に包まれる

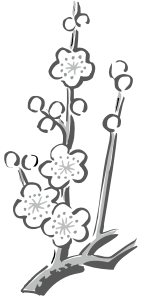
荒木 孝  
加藤 桂子  
河野 秀夫  
志摩 佳聲  
益田 岩郷  
西村 美保子  
宮川 柳酔  
結城 ときえ

## 短歌

△吉田短歌会▽

老いさびて風吹くまゝに來てみれば四国路のはてみかん残り  
三つ編みに結び合ひした友の逝き散る花びらの心に重し  
ゆらゆらと撓みて揺れる木の上に軽業師の如みかんを摘みぬ  
小流の二つ相寄り川幅の広がる砂州に草の芽ぶきぬ  
目も鼻も借り物めきて身に添はずブルーに暮るる杉花粉症

脇口 定稔  
奥平 美代子  
加賀山 愛  
岡田 幸子  
伊豫路 たく磨



## 俳句

△草の実句会▽

初競りの指文字高く林立す  
洗面の水の硬きも寒の入  
凍星のはりつく空や投函す  
まだ誰も踏まぬ日差しを冬田道  
街沈む寒月光の海の中  
門閉めて後の不安霜の夜

風戸 晴美  
島瀬 吉良  
細川 英子  
宮崎 きくを  
森田 たみ  
薬師寺 彦介

△牛鬼句会▽

初午や古き鳥居の謂れ聞く  
あいまいな雪情報の旅初め  
白梅や道を隔てて寺神社  
白魚まつり河原に据ゑしピザの窯  
ペンギンの水中トンネル春淡し  
左右より夫婦で寄する白魚網  
冬帽子おさへて海を見てをりぬ  
蠟梅に重たきほどのみくじかな  
枯菊に紅色のこる農家かな

池田 香代子  
大村 たか  
坂本 扶美子  
高畠 光子  
中浦 ミエ子  
水野 幸子  
宮下 京子  
山能 秀子  
平岡 千代子

△いそしぎ句会▽

綾取の梯子を崩す日向ぼこ  
鯉の餌百円日脚伸びにけり  
梅三分名刹の句碑訪ねけり  
石段の急勾配や浅き春  
ぼかぼかと土の温もり手鋏振る  
鐘沓ゆるぎはし多き札所寺  
じゃこ天は四十万川の石尊入り  
石尊採る河口を望む佃煮屋  
供養塔まで水仙の白ばかり

片山 智恵子  
佐々木 咲子  
佐々木 毅  
二宮 晴美  
古谷 八重  
村尾 昭子  
毛利 節子  
渡辺 正子  
平岡 千代子